# 現代社会を俯瞰する

vol.7

松島 克守
Katsumoti Matsushima

## 教育学の学術論文の研究分野

教育学の俯瞰を行う。教育はしばしば様々な社会問題・事件の根本問題として語られ、誰もが一家言を持つ分野であるが、その学問としての体系はよく知られていない。そこで、教育学に関する学術雑誌を網羅的に収集して引用ネットワーク分析を用い、俯瞰的な分析を行った。

教育学に関する研究で最も大きいのは、障害児教育などの特殊教育に関する領域である。2番目に大きいのは、自ら学ぶということと教育を受けることの関係や効果、学習の動機づけに関する領域、3番目は教育方法に関する領域、4番目は何故か化学という一つの科目に関する研究である。これら上位4クラスタに含まれる論文数はそれぞれ一万を超えている。

5番目のクラスタではIT教育とIT活用について論じられており、上位10クラスタの中で最も新しい領域である。その他のクラスタには、保険と健康、教育における評価の在り方や評価法、才能のある子をどのように選別し育成するか、経済に関する教育、第二外国語に関する研究がある。

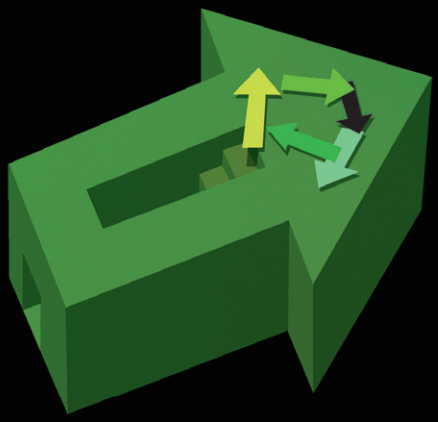


Illustration:ネモト円筆

## 2000年以降の研究分野

では、2000年以降の論文だけをみてみるとどうであろうか？一番の特徴は、科学討論や多様性、医療と倫理といった最新のトピックが大きな研究領域になっていることであろう。

最大のクラスタは#1の科学討論に関するクラスタであり、討論の重要性や、科学的なセンスや倫理の獲得などが重要視されている。2番目に大きいクラスタは、図1の#2、学習と教育に関するクラスタが元になっていると思われる。研究の中心的なテーマは課題型学習（problem-based learning）となっており、学習の動機づけとして、学ぶことが問題の解決に繋がることを実感することが大切であることや、課題に対し学習事項を主体的に探索し学習することで知識をうまく吸収できることなどが示されている。

また、このクラスタの中心的な学術雑誌が医療教育に関する学術雑誌であることから、課題型学習の重要性とその効果は特に医療分野においてよく認識されているものと思われる。

教育学の全体の構造は近年においてそれほど大きく変わっているわけではない。しかし、いくつかの最新の研究成果、たとえば、課題型学習や科学討論を授業に取り込む方法などは高等教育だけではなく、初等教育においても積極的に取り入れていいのではないだろうか？

**PROFILE**

まつしま　かつもり
俯瞰工学研究所 http://www.fukan.jp/
所長（東京大学 名誉教授）
東京大学工学部卒業、IHI航空機エンジンの生産技術者を経て、東京大学で生産システムの知能化、アレキサンダー・フンボルト財団奨学研究員としてベルリン工大でCAD／CAMの研究に従事。その後日本ＩＢＭでパソコン、製造業のマーケティング戦略の責任者、プライスウォーターハウス日本法人常務取締役を経て、99年より東京大学工学系研究科教授。経営戦略学専攻で「俯瞰経営学」を講義。総合研究機構・機構長、イノベーション政策センター長等を歴任、09年3月退官。現在も地域活性化プロジェクトの支援、プラチナ構想ネットワークなどを推進するとともに、上場企業の社外役員など経済活動にも参画。（NPO）ビジネスモデル学会会長、（NPO）ITコーディネータ協会理事などを務め、主な著書に『知の構造化の技法と応用』、『地域新生のデザイン』、『MOTの経営学』などがある。

## 現在の大学教育の現場報告

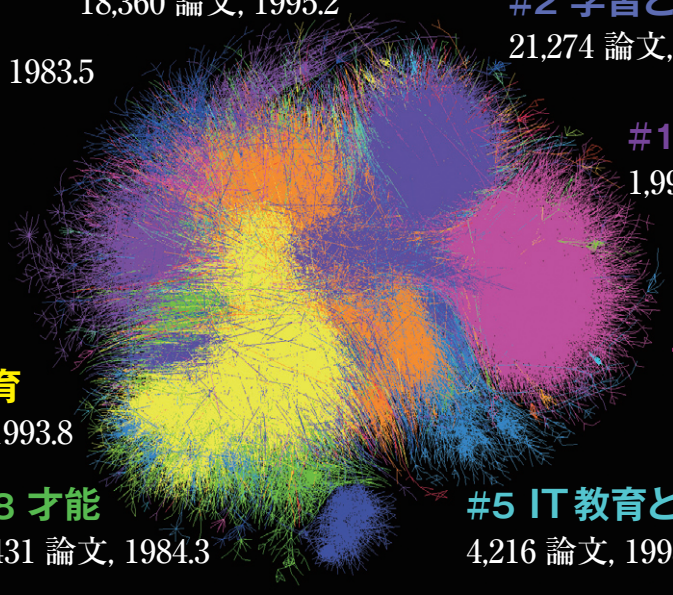
最近、東大生の質が落ちているのではないかということが話題になるが、結論から言えばほとんど変わっていない。自分自身が学生だった1960年代、助手として学生指導した70年代、そして教授として学生指導した2000年代を比べての実感である。

意外と認識されていないことであるが、現在の学生は物心ついてからずっとデフレの日本、すなわち失われた20年の中から巣立ってきているのである。したがって、高度成長期の私の時代の学生とは当然違う。むしろ現実的で堅実な面がある。我々の時代は就活などということはほとんどなかった。未来に対して何の不安もなかった。物心ついてから企業の倒産、リストラ、少子高齢化などの話やニュースをずっと見てくれば、薔薇色の明るい未来を語ることは難しい。いい学校出て良い会社に入る、そこで人生を展開するというライフスタイルは無い。だから、自分自身の能力と力で近未来を生き抜くという現実的な意識が今の学生は強い。

ちなみに、40代半ば以降の社会人はバブルを体験していない。社会に出てからずっと企業の倒産と経費節減、企業改革、そしてデフレという失われた20年が社会人としての人生である。むしろ、声高に教育の不毛や改革を主張する高度成長期の世代は、すでにリタイアし、高齢者として社会の活動から離れている。すなわち、現在の日本はこの3世代からなる社会構造を持つことを認識すべきである。

大学教育に話を戻すと、秋入学やさらに推薦入学などの制度改革が最近議論されているが、こんな制度改革をしても本質的に大学教育は変わるわけは無い。もし、国際化のために秋入学を推進するのであれば、それは適切な行動では無い。大学のカリキュラムや教育内容を国際競争力あるものに抜本的に改革すべきである。推薦入学の問題点はその判断基準である。一時期AO入試がもてはやされたが、現在では評価は芳しくない。そもそも、入学試験で才能が問われることはないと思う。また、大学は天才の養成所では無い。大学の教育の使命は、社会にとって有用な人材を育成することである。しかも中長期の視点で社会のニーズを認識する必要がある。少子高齢化と環境という課題から社会の価値観は大きく変わるが、これに対応する教育内容が議論されるべきである。

**【図1】教育学俯瞰マップ**




## リーダーシップ教育

主要大学についていえば社会のリーダーの育成が使命であるが、リーダーシップの教育は大学では遅いと思う。リーダーシップの教育は、小学校、中学校、高等学校で行わなければならない。無論、そのリーダーシップ教育を踏まえてリーダーの自覚をもたせることは、大学の教育の範疇である。いずれにせよ、経済界、行政や政治のリーダーが、あるべきリーダーシップを示す必要がある。これなくして、リーダーの自覚、リーダーを目指す意欲を学生に求めることができない。いい過ぎかもしれないが、現在のリーダーの再教育が最重要課題かもしれない。

大学での教育の現場からいえば、実は日本語の教育に大きな課題を感じる。不思議なことだが、私たちは小学校以来、国語で何を学んできたのかよくわからない。外国語の場合は読み、書き、話す、聞くという教育がある。これに対し、日本語の場合は現代文と古文の読み方教育は意識できるが、文章を書くとなると読書感想文を書かされた程度の記憶しかない。ましてや、話し方は教育さ

れた自覚がない。さらにいえば、聞き方について全く教育はなかったと思う。実は、東大での授業ではこの日本語のリテラシーの問題点が顕在化する。読み方についても論理構成や意味の理解、文脈から来る隠れた主張を読み取る力は、実は不十分である。話し方は、言葉遣いと同時に、論理的に構成された話を口頭でする訓練ができていない。私の授業では、まず学生言葉を大人の言葉に直させることから始める。論理が混乱している場合は指摘する。読み方については、経営学の日本語の論文を精読する訓練を繰り返す。精読して認識した内容をプレゼンテーションさせることによって、何を認識したのか確認させる。書き方は卒業論文や修士論文の中で見ていくが、これはさすが入試を突破して来た人間だけに、そこそこの能力がある。

問題は聞く力である。もともと、話す人が論理的に混乱したり、飛躍したり、言葉足らずだったりするため、頭の中で虫食い算をしながら本当に相手が話したいことを復元する必要がある。だから訓練がいる。ただ、どのように聞き取っているのか確認するのが困難である。そこで私は授業の中で積極的に質問させ、どのように耳からの情報を認識したか確認させる。したがって、授業中の質問の回数はポイントとなる。

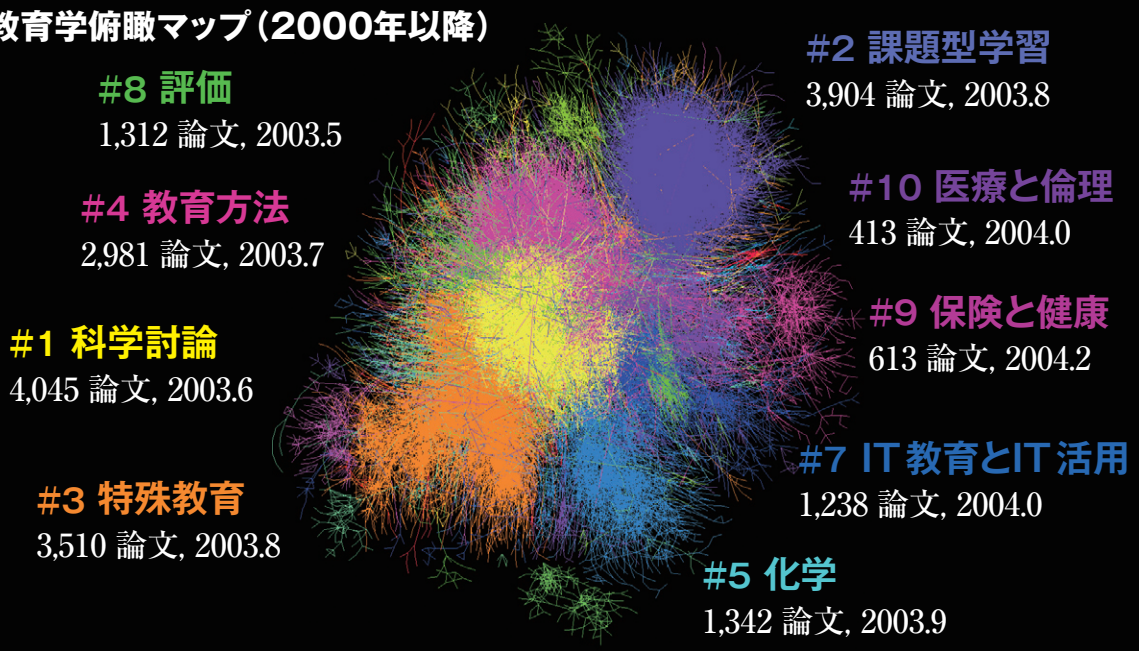
その先は意見の交換、すなわち議論による協創である。時々学生間のQ&Aをやり直させる。質問と返事がすれ違っている場合や、質問が長くて論旨が不明な場合、または答えが長くてよくわからない場合は、それを教材としてクラスの中で適切な質問の仕方やもっと良い答え方を考えさせる。こんなことを東大でやっているのかと、驚かれるかもしれないが、日本語できちっとモノを言い、相手の言いたいことを正しく理解する能力がなくては、どの社会でもリーダーになれないし、有為な人材になれないからだ。

この日本語のリテラシーを上げるためにも、国語教育の見直しを強くお願いしたい。とりわけ、読書の習慣をつけることが、その後の成長や知的水準の向上のために極めて重要なことだと実感している。あまりにも本を読んでいない。

## 本郷の自主ゼミ

大学を定年になって5年目になるが、今年も現役時代の授業を本郷の技術経営戦略学専攻の学生を中心として自主ゼミとして実施している。

**【図2】教育学俯瞰マップ（2000年以降）**




これは学生の希望で続けている。この授業は基本的に知識を教えることをしない。自己研鑽とクラスメートとの切磋琢磨によって、能力を発現させることを目的としている。5人を1チームとして、グループで毎週出題される課題について情報を収集し、それを分析して発表する。相当のワークロードで、ほとんどの学生は、前日は徹夜が多いという。当日は午後1時から4時過ぎまで行う。現在は自主ゼミのため単位は付かない。一割程度はドロップアウトする。M1で自主ゼミを受講した学生の中から、自発的にTA（Teaching Assistant）が数名構成され、この授業を次年度運営する。

この授業では私はファシリテーターでとコメンテーターに徹し、知識を教えるというより気づきのきっかけを与えることにしている。加えて、社会的な規範やビジネス社会の慣行や常識を解説することはする。実は、授業の最初に正しいお辞儀の仕方を教えている。

あくまで私の周辺の学生の状況ではあるが、現在の学生は私たちの時代の学生よりずっとしっかりしていると思う。教育ほど重要で有為な仕事はないと思う。仕事をすればするほど教育学の奥深さを実感する。